

2020年1月5日
アイレック
まつり

上野千鶴子さん(社会学者・東京大学名誉教授)講演会

生きるのに遠慮はいらない —み~んな弱者になる時代に—



冒頭、「台風により講演会が延期になったため」「嵐を呼ぶ女、上野でございます」と和やかにユーモアを交えながら、上野さんは講演テーマについて「自分が弱者になることをどうやって受け入れていけばいいのか。考えてみたい」と思い、お話を引き受けてまいりました。」とお話を始められました。

当事者主権

当事者とは、女性・子ども・高齢者・障害者などの社会的弱者であり、当事者能力を奪われてきた社会的少数者をいいます。(女性は人口では多いけれど、意思決定権からいえば少数派) 主権とは、自分の運命を自分で決める、他人に譲渡することのできない至高の権利をいいます。

当事者研究がブームになってきた

自分のことは自分では意外とわからない。当事者研究とは自分で自分自身のことを研究することです。女性が女性を研究する女性学こそ当事者研究のパイオニアでした。

経験からにじみ出た知識はすごい。脳性麻痺という障害がある東京大学准教授・小児科医の熊谷晋一郎さんは、「自立とは依存先の分散である」、「自立とは、依存していない状態をいうのではない。誰か1人に深く依存していると思わないで済む状態」と当事者が生み出した経験知(専門家が生み出した知識ではなく)から言葉にしています。

女性が増えるとかが変わる

女性の参画は手段であって目的ではありません。社会を変えるためにそれぞれの場に女性を増やすのです。では、いかなる方向へ変えるのか。ジェンダーとは男女の非対称な力関係のことです。権力が男性に偏るからと、フェミニズムは女性が「男並みの権力を持ちたい」思想だと誤解されがちですが、男女の役割を単に入れ替えるだけでいいということではありません。弱者は弱者のまま尊重されたいのです。

ケアとは非暴力を学ぶ実践

弱者をケアする中で、力を持った人は力を持たない人を支配し、コントロールしたくなるものです。女性も「親」として最高の権力者になることがあります。権力の行使の誘惑に打ち勝つのは大変です。それが虐待になることもあり



当事者主権
中西正司、
上野千鶴子著
／岩波新書

ます。ケアとはその誘惑に打ち勝ち続ける長きにわたる実践です。

弱者が弱者のままで尊重される社会を

日本は超高齢社会。人生100年時代となりました。強い人がずっと強者でいられるわけではありません。どんな人でもいつかは必ず弱者になる自分を受け入れなければなりません。となれば私たちがほしい社会とは誰もが安心して弱者になれる社会なのです。

『当事者主権』を始め、「ご自身や著名人の書籍を20冊以上ご紹介いただき、人工透析中断死亡事件(2018年)などを例に、命や意思決定、安楽死の話:レポートではお伝えしきれない盛り沢山な2時間でした。講演内容は『アイレックまつり記録集』にも取り上げます。ぜひご覧ください。」

(栗山)

